

近代日本が抱えた新旧文化の相克やそれに対する人々の本音が語られる

「身装」文化のデータベース構築から生み出された結晶の一つ

難波知子

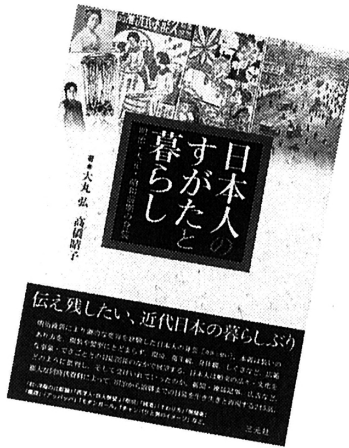
大丸 弘・高橋 晴子 著

▶ 日本人のすがたと暮らし

明治・大正・昭和前期の身装

12・20刊 B5判536頁 本体8000円

三社社



本書は、「身装」文化のデータベース構築という壮大なプロジェクトから生み出された副産物、いや結晶の一つだろう。明治維新(1868年)から第二次世界大戦終結(1945年)までの、日本人の「身体」と「装い」に生じた変容を具体的なエピソードをもとに論じた大著である。本書自体は、大阪の万博記念公園内にある国立民族学博物館(みんぱく)の「身装画像データベース」へ近代日本の身装文化に組み込まれた「参考ノート」がもとになっている。しかし大著たる所以は、ここにたどりつくまでの著者の取り組みにある。まずは、そのとてつもない大仕事について言及しておかねばならな

い。現在みんぱくから、服装・身装文化資料に関するデータベースは四種類提供されている。これらのデータベースは著者が中心となって整備された。一つ目は、みんぱく(博物館)が所蔵する衣服・アクセサリの標準資料と分析情報、検索・閲覧できるもの。約23万件の情報が収録されている。二つ目は、身装文化に関する文献資料の検索が行なえるもの。ここには、明治以降現在までに刊行された図書や雑誌に加え、みんぱくが所蔵する外国語の民族誌文献も含まれ、またその種類も研究成果を発表した学術論文から、研究対象となる同時代資料に至るまで、約17万件がカバーされている。評者も学生時代にお世話になったデータベースで

三つ目は、明治元年(1868年)から一年ごとに、日本人の身体と装いに関連した出来事をまとめた電子年表である。当時の新聞

・雑誌や法令などから該当する記事が抽出され、約1万1000件のデータが収録されている。一部の出典については、「原資料」の画像が見られ、わざわざ資料を見に出かける必要がない。何ともありがたいサービスである。四つ目は、三つ目の電子年表と対になる画像のデータベース。これまで収集されてきた資料から身装に関する画像が抽出・分類され、約5000点が自由に閲覧できる。身装、特に服装について知るために、図像資料は不可欠である。ここに本書のもととなる「参考ノート」が、画像の背景理解のために組み込まれている。ただし、本書は単なる画像の解説というにとどまらず、これまでの著者らの取り組み——すなわち何十万件という膨大な量の情報処理——を経てたどりついた珠玉の身装文化論といえる。量から質へ

の転化と言うが、本書の質は膨大な情報量に裏付けされている。さて、厚さ約4センチ、重量約1・4キログラム、ページ数535頁の本書は、10の

テーマ、245の項目から成る。その内容は、明治以降の身装文化を中心に、それらを成り立たせる社会の仕組みや人々の意識、情報媒体となるメディアに至るまで多岐にわたる。明治以降といっても、欧米由来の洋服文化の受容にだけ関心が向けられるのではなく、江戸以前の人々の暮らしや価値観が新しい社会の中で衰微・変容していく様子も論じられる。例えば、明治維新後、数年のうちに男性の髷と武士の帯刀は急速に姿を消したといわれるが、旧来の身分制度や慣習に基づいた装いとそれに対する人々の意識は、急激な方向転換についていけなかったらしく、丁寧に固執する男性や、魔刀令が出た後も仕込杖(杖のなかに刀身を仕込んだもの)を携える士族もいたという(魔刀令と士族)。

一方、女性の場合は、人妻の肩削りとお歯黒の習慣がゆるやかに廃されていった。髪型も含め、肩削りやお歯黒はそれをする女性が未婚か既婚かを示す記号でもあり、それ

まで培われてきた女性美を体現するものでもあった。ところが、肩がなく、歯の黒い日本人女性の姿は、外国人に明治の初めに日本を訪れた欧米人の眼には異様・不潔に映ったようで、文明国としての体裁を整えたい日本の為政者たちは、まず皇后・皇太后からそれらの風習を廃止した。しかしいったん定着した習慣を変えるには時間がかかり、江戸時代生まれのある老女は、大正時代までお歯黒を続けていたという(眼の周り「歯」唇)。

思想

歯を黒く染めるお歯黒の風習は、その見た目の不潔さ・不気味さが批判的となったが、日本人の身体や住まい・路地から漂う異臭に対して、外国人から指摘されることとが多かった。その「おい」とは、女性の結髪や垢の付いた着物、便所に溜められた糞尿が発生源である(環境悪

臭)。日本人には頻繁に入浴する習慣があったものの、洗髪は回数1回程度(「頭髪」)、絹ものを主体とする着物はできるだけ洗わずに、汚さない工夫をしていた(「洗濯」)。こうした「おい」への対策として、清潔観を養う教育や公衆衛生の実施(「清潔/衛生/健康」)、さらには洗濯のための水道の整備(「水道」)、洗濯用具・石鹸の使用(「石鹸」)が導かれたのだらう。

ここで言及できた事例はごくわずかだが、本書には近代日本が抱えた新旧文化の相克やそれに対する人々の本音がありと語られている。時に生々しく露骨でさえある。だからこそ、読む者の価値観が揺さぶられ、これまでとは異なる視点から日本人の「すがた」と「暮らし」が見えてくる。

(お茶の水女子大学助教)

《図書新聞》

2017年8月5日